

発達障害をもつ生徒に対する心理的な支援についての一考察

- 自閉症生徒の問題行動の解決をめざした支援から -

湯浅 和夫

要約

近年、発達障害者に対する立法的な支援が拡充されてきたのは周知の事実である。教育の現場においても、発達障害をもつ生徒に対する支援の充実が問われている。生徒の卒業後、新しい環境適応をめざすこともその要素のひとつと考えられている。本研究では、そのリスク要因と考えられている自閉症生徒の問題行動（「かみつき」）に視点をあて、その解消のための心理的な支援についての事例研究を実施することにした。筆者は、そのためのツールとして「Fingar marker」の考案に約3ヶ月を要したが、その効果について研究し考察したところである。なお、本研究でめざしたこれらの問題行動の解消と「エディプス期」の課題克服の関連性を見出すことはできなかった。今後の課題としたい。

キーワード：自閉症生徒，かみつき，Fingar marker，切り替え，ファンタジー

序章

我が国では、約60年ぶりに教育基本法（2006）が改正されたのを受け、文部科学省（2008）は「各学校間や職業生活との円滑な接続に留意しながら、学校段階ごとの発達課題を踏まえた質の高い教育を保障し、一人一人の学ぶ意欲や学力を向上させるとともに、豊かな心と健やかな体を育成し、今後の変化の激しい時代を主体的に、かつ、幸福に生きるための強固な基盤を養う必要がある。」として「教育振興基本計画」を策定している。

同省は、この計画を「本計画は、教育の目的を実現するために達成すべき目標を新たに掲げる。」として、さまざまな諸課題に対応することが位置づけられた。これが我が国の教育の目指すべき姿であり、教育による「人づくり」が必要であるとの考え方を示している。我が国は教育立国を目指し未来を切り拓く教育の振興に取り組む決意が感じられ、都市化や少子化の進展などによる社会の変化によって、個人が明確な目的意識を持ち何かに意欲的に取り組むようなことが難しくなっていることについても言及している。

これらのことから、筆者は本人や保護者などに対する心理的な支援の方策として、個々の事例のアセスメントや事例研究などの実施による効果に期待しているところである。また、同計画は「不登校の子どもをはじめ、手厚い支援が必要な子どもの教育、いじめや少年非行など問題行動への対応も求められる。」と指摘している。これらの問題の解決は、いわば時代の

要請である。このように、教育の現場では生徒に対する心理的な支援の必要性が認められている。なお、今日的な諸問題への対応として理論や専門性を超えたコラボレーション（協働）の重要性が問われている。

さらに、2007年に学校教育法も改正され、こころや身体その他にさまざまな問題を抱え支援の必要な児童・生徒に対する教育が特別支援教育として法的に位置づけられた。この教育の実施については、幼・小・中・高をはじめすべての学校が対象とされている。これを受けて、文部科学省（2007a）は「特別支援教育の推進について（通知）」を都道府県の知事や教育委員会等に通知し、この教育を推進する強い意志を示している。このことは、学習障害などの発達障害を含めた障害をもつ生徒に対する教育のみにとどまらない。筆者は、児童・生徒一人ひとりの事例に応じた心理的な支援がそれぞれの生活を豊かなものにできるものと確信するところである。

筆者は、自閉症生徒の問題行動（主にかみつき）の解決に向けた心理的な支援について考えたところである。その対象については、「S-M社会能力検査」において各項目とも3～4歳（暦年齢18歳）の能力状況を示す自閉症生徒とした。学校現場において、彼に対する心理的な支援の必要性やその効果などの事例研究をしたいと考えている。

なお、これまでの文献や研究物等では、「自閉症」や「自閉性障害」、「自閉症スペクトラム」などさまざまな名称が使用されているが、本研究に使用する名称については「自閉症」に統一して記述することにしたい。

こころの発達と発達障害

1. 発達障害について

発達障害という概念は、1980年代からWHOやアメリカ精神医学会などの医学的な専門領域で診断分類が試みられるようになった。アメリカ精神医学会（1994）の「DSM-IV（精神疾患の診断・統計マニュアルの第4版）」には、自閉症は広汎性発達障害のカテゴリーの中に自閉性障害として含まれている。表-1は、DSM-IV（一部修正）の該当部分である。

古荘（2006）は、「大脳高次機能の非進行性の障害が脳の発達時期に生じ、運動機能や脳幹などの生命維持機能の障害ではなく、根本は知的な機能の障害であること。」と医学的立場から発達障害を説いている。このことについては、中井、橋本のほか多くの研究者からも同様の見解をみている。

さらに古荘（2006）の言葉を借りてまとめれば、「物事を理解したり、判断したり、記憶したり、推論したり、思考したりする機能の障害が脳の発達時期である小児期に生じ、その結果発達に遅れや歪み、偏りが生じたもの。」となる。

自閉症の発症原因は解明されていない。菊池（2004）は「現在のところ、いずれの研究からも自閉症の発症メカニズムについての決定的な確証は得られていない。」と述べている。このことについて、発症原因について実証されておらず、将来の研究に待たなければならない。

表1 発達障害の分類 (DSM - 一部修正)

精神遅滞 (知的障害)
広汎性発達障害 (1) 自閉性障害 (2) レット症候群 (3) 小児期破壊性障害 (4) アスペルガー障害 (5) 特定不能の広汎性発達障害
発達の部分的障害 (1) 学習障害 識字障害 算数障害 書字表出障害 (2) コミュニケーション障害 (3) 運動能力障害
行動障害 (1) 注意欠陥多動性障害 (2) 反抗挑戦性障害 (3) 行為障害

なお、橋本(2006)は、「自閉症の病理所見は広汎であるが、遺伝要因および妊娠の比較的早期に何らかの原因があって脳幹、小脳、周縁系、帯状回を含む前頭葉、側頭葉を中心に発達障害が生じていることが推測される。」との見解を示している。

2. 臨床心理学からみた自閉症の先行研究について

Kanner(1943)の研究に端を発した自閉症研究は、Rutter から Baron-Cohen らに受け継がれた。彼らは、自閉症に特徴的な能力の落ち込みを自閉症固有の能力欠陥としてそれぞれ以下のように解釈している。

A. Kanner の研究

Kanner (1943) は、自閉症の特徴を4項目にまとめている。(a)人生早期からの極端な自閉的孤立、(b)コミュニケーションのための言語を用いない、(c)同一性保持への強迫的欲求、(d)ものに対する関心やものを扱うときの巧緻さ

B. Rutter の学説

Kanner は統合失調症と自閉症との共通点に目を向けた。1970年代になって Rutter はその相違点に注目している。(a)統合失調症の発病率は男女間に大差ないが、自閉症は男子が圧倒的に多い、(b)統合失調症のような幻覚妄想が自閉症にはみられない、(c)発症年齢が大きく違う、このことから、Rutter は統合失調症と自閉症の関連性を否定した。

C. Hobson の「感情認知障害説」

1980 ~ 90 年代の自閉症研究は、社会性の障害、情動的な対人交流の障害を中心的な問題としてどうとらえるかに回帰している。その代表的な成果の一つが Hobson の「感情認知障害説」であった。

D . Baron-Cohen の「心の理論障害説」

Hobson の「感情認知障害説」に異論を唱えたのが、Baron-Cohen の「心の理論障害説」であった。自閉症の子は他人が心の中でどのように考えているのか正しく推測する洞察能力に欠陥があると結論づけている。

このように、Kanner に始まる自閉症研究は、その後もいろいろな角度から研究がなされ幾度となく変遷している。現在においては、古荘（2006）の見解のような「大脳高次機能の非進行性の障害が脳の発達時期に生じ知的な機能の障害であること。」という説が主流を占める。

3 . 「エディプス期」の課題について

Freud,S は医学者としての立場から、夢分析や無意識などの研究によって精神分析学を医学的・心理学的な理論として確立させている。Freud,S が自身の自己分析をすることによって、エディプス・コンプレックスを発見したことは有名である。このことは、彼が精神医学的に分析家であったことを物語るものである。

3 歳から 6 歳くらいまでの時期は「エディプス期」とされる。精神分析学といえばエディプス・コンプレックスというくらい有名な考え方である。2 歳くらいまでの子どもは、母親の考え方や行動様式などをモデルとする。この時期まではすべての欲求が主に母親によって満足させてもらえる場合がほとんどであるが、年齢が進むうちにそうではなくなってしまう。そのうえ、性に応じた生き方を要求されはじめる。このことに対する対応策として、女の子の場合は母親をモデルとしていればいいのだが、男の子の場合は母親から父親をモデルとしなければならなくなる。つまり、男の子は同一化の転換を余儀なくされることになる。

この時期の心理的な特徴としては、男の子は母親に、女の子は父親に恋愛のような気持ちを抱くようになる。これが性別意識と異性の親に対する異性愛的意識の芽生えであると考えられている。このことにより、男の子は父親と女の子は母親との間にそれぞれ敵対する三角関係となり、心理的な葛藤の時期を迎えることになると考えられている。子どもたちは親と敵対する関係になることになる。そして、子どもたちは悩みながらも親を敬愛することができるようになることがこの時期の発達課題であるといわれている。特に、この時期の男の子は父親との関係において去勢不安を抱くことがあるともいわれ、Freud,S は男根期に続く発達課題として位置づけられた。

エディプス・コンプレックスについて、小此木（1973）は、「Freud,S はヒステリーの女性たちとの出会いを通して、彼女たちの幻想機能に着目する。」と述べ、この原因として「(Freud,S に) 幼児期に受けた性的な外傷があった。」ことをあげている。これは、Freud,S が幼少期に好奇心から両親の寝室に入り込んだことを父親に怒鳴られたことから、父への憎しみを抱いた記

憶によるものとされている。これが、エディプス・コンプレックスの根源である。

さらに、Freud,A (1936) はエディプス・コンプレックスについて、以下のように 発達課題としてのエディプス・コンプレックス、 エディプス・コンプレックスを克服するための方法、 エディプス・コンプレックスの克服について、の3つの観点からその克服の重要性を説いている。

このように、精神分析学の分野ではエディプス・コンプレックスの課題の克服は重大な発達課題のひとつとして位置づけられ、それ以降の自我の発達に大きく影響するものと考えられている。

アセスメントの実施について

本研究では、自閉症生徒の問題行動として「かみつき」(以下「パニック行動」)を取り上げ、その解消に向けたアセスメントを実施したところである。彼らの養育については母親が主体となっており、母子関係を優先させるあまり父性的なエネルギーが抑制されているものと考えられた。なお、このことが母子関係を過度に密着させ、彼らの心理的な発達に影響しているものとアセスメントしたところである。

彼らの「パニック行動」は、常に衝動的であると考えられた。このことについて、母子関係が優位であると予測されたが、断言するだけの事例数ではないことをあらかじめことわっておかなければならない。このことから、彼らには「エディプス期の課題」が存在し、各所で「パニック行動」を起こしているものと推測したところである。その結果、彼らの「パニック行動」を解決するためには、これらのことを意識した心理的な支援が効果的であると仮説をたてたところである。

また、彼ら自身から発する要求行動があることについて注目することにした。この要求行動は日常生活でよくみられ、周囲にこの要求が受け入れられない場合や本人の意図にそぐわない場合などは「パニック行動」に発展することが多く、周囲の者に「かみつく」まで発展することがよくみられた。特に、彼らが心理的に不安定な時など、たまたま手の届くところに人がいたらいきなり「かみつく」こともあり、母親からは「パニック行動」の対処方法を教えてほしいとの要望が寄せられた。

もう一つの特徴は、ファンタジーの世界を持っていることである。それと関連した独り言などもよく聞かれた。その影響でいきなり叫ぶこともあり、母親はその対応に苦慮しているとのことであった。このことについて観察を継続した結果、自分自身の世界とファンタジーの世界を行き来しているのではないかと推測したところである。ファンタジーの世界で長い時間を過ごし、思い出したかのように自分自身の世界に戻っているように感じられた。彼らが自分自身の世界でいられる時間は案外短かった。彼らの要求行動がみられるのは、この自分自身の世界に戻ったときによく出されているのに気づくまで時間がかかった。これが単なる空想の世界なのか否かについては、筆者は判断する立場にないのでここでは言及しない。

これらの2つの特徴は、それぞれ独立して存在しているように見える。しかし、実際は両者が相互に関連し合っているのではないかと考えたところである。彼らの卒業後の人生を考えれば、何らかの環境への適応が必要不可欠である。このことから、彼らの「パニック行動」は克服されていなければならないと考えられた。このことが、彼らの「生きる力」につながるはずである。実際の学校の学習活動においては、「トークン・エコノミー法」などの専門的な理論が効果的に導入されている。その結果、ほぼ毎時間のように「授業をがんばったらパソコン。」などの要求行動がよくみられた。これらは、彼らの成長を支援するための重要なツールとなってきたものと考えられる。さらに、彼らの日常生活の場面において父性的な要素を取り入れることによって「心理的優位性の制限」および「要求行動への制限」の必要性を感じたところである。このことは、彼らの「パニック行動」が卒業後の新しい環境への不適応要因となっていると理解できたからである。

このようなアセスメントをもとに、筆者は二つの方策をたてたところである。第一の方策は医療との連携を図ることである。それまで、彼らは病院に行ったことがなく主治医不在の生活を危惧したからである。学校内のケースカンファレンスおよび保護者への説明を経て、これが実現したところである。第二の方策として、「Fingar marker」を考案したところである。これは、Newson (1978) の「vocal marker」の考え方に、彼らの認知形態が視覚優位であることを意図して指サインを加えたものである。筆者は、この指サインを「Fingar marker」として使用した。最初の段階では、指を示す際それに対応する言葉（「vocal marker」）を併用することにした。具体的には、人差し指1本（「かみません。」）、人差し指と中指の2本（「蹴りません。」）、人差し指と中指と薬指の3本（「聞きます。」）、人差し指と中指、薬指、小指の4本（「言いません。」）にした。要求行動が見られた瞬間、人差し指、中指、薬指、小指の4本でこれに対応することにした。

考察

1. リスクアセスメントについて

図1は、八並（2006）の『早期の総合的・発達的なアセスメントの重要性』のモデルを一部修正してシステム化したものである。自閉症生徒に限らず、生徒に対する心理支援においては、リスクアセスメントをシステム化することによりその効果が高められるものと考えられる。このことについて、八並（2006）は「リスク予防のためには早期のアセスメントの実施が不可欠である。」と述べている。このモデルのシステム化は、生徒のさまざまな行動に対する予防的・危機介入的な関わりが実現できるものと考えている。

2. 「トークン・エコノミー法」の効果について

成瀬（1985）は、学校や施設等でパターン化された学習のことを生活訓練として、「生活訓練は（中略）、えてして一方的な働きかけにならざるをえない。つまり、日程プログラムに従

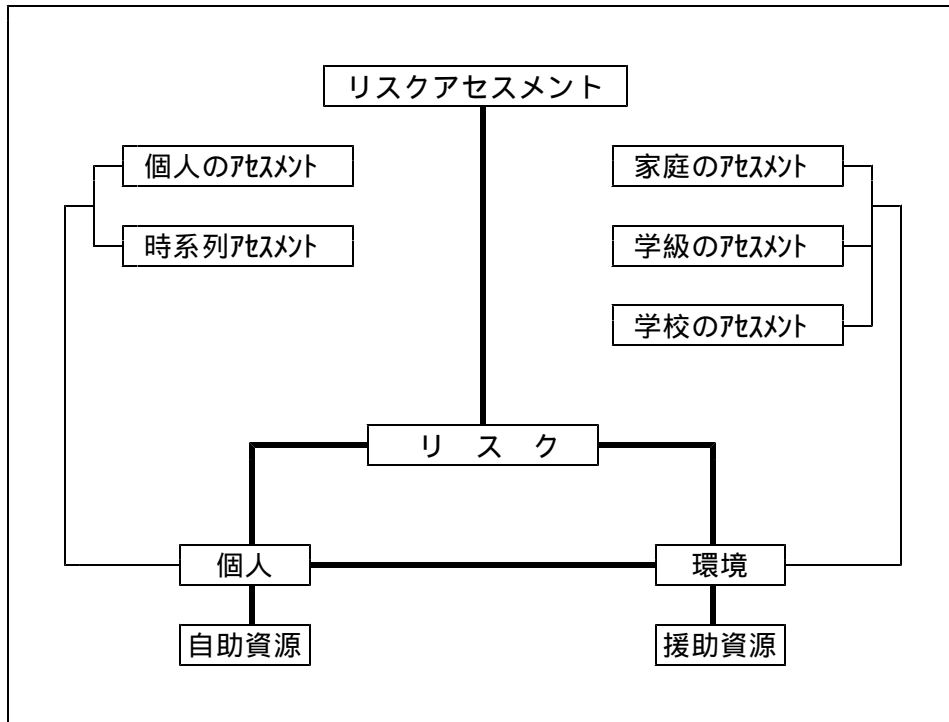


図1 八並(2006):「早期の総合的・発達的なアセスメントの重要性」(一部修正)

ったしつけであり，習慣化であり，子どもらの生活を外面的にチェックし，管理していくことにつながりかねない。」と説いている。

彼は学校での学習活動を自分なりに理解しているように思えた。その理解過程において，「トークン・エコノミー法」を導入した指導形態による効果が認められた。特に，行動をコントロールする傾向を向上させているものと考えられた。

しかし，彼はエネルギーの限りを尽くした要求行動をしてしまう可能性があった。彼を観察するたび，この方法による指導形態の難しさが感じられた。彼にとって都合の良い「トークン・エコノミー法」についての概念化が予測されたからである。つまり，「トークン」が得られるのは当然であり，自らの要求を実現させようとするこだわりの態度を強化させているようでもあった。この要求行動が満たされない場合，一瞬にして「パニック行動」に発展させてしまうことがよくみられたからである。

3. 発達障害とファンタジーについて

河合(1990)は，「子どもたちがファンタジーを好むのは，それが彼らの心にぴったりくるからなのだ。」とファンタジーの意義を明らかにしている。さらに河合(1991)は，「そのために(子どもたちの正常な発達)，ファンタジーは大きな役割を背負っているのである。」とも述べており，子どもたちのファンタジーを肯定的にとらえる姿勢を示している。

また，河合(1991)は「ファンタジーは，(中略)人間がそれに圧倒されてしまうとどうなるだろう。」とも警鐘を鳴らしている。また，古荘(2006)は，「広汎性発達障害をもつ子ども

は、時にファンタジーの世界に浸り現実との区別がむずかしくなることがあります。」と説くように、いくつかの捉え方がファンタジーには存在している。

彼もファンタジーの世界に浸る生徒であり、日常生活のほとんどをこの世界で過ごしているように思えた。そして、衝動的に何らかの欲求が生じた時、現実世界に戻り周囲との関係を再開し要求行動に出ることによってそれを満たそうとしているものと考えられた。なお、この要求行動についてはマズローの提唱する「所属と愛情欲求」にとどまっており、そのほとんどが自分に対する何らかの褒賞要求となっている。ここに「父性原理」の必要性が感じられたところである。この要求行動のはじまりが、ファンタジーの世界から現実世界に移行した瞬間であろう。まさに、これが Putnam, F.W. (1997) の説く「切り替え」であると考えられた。

これらのことは、単なる空想にふけているだけなのか、それともそれ以外の状態なのかについての判断を難しくしているようにも考えられる。このことから、ファンタジーは二面性をもつと考えられる。

A. ファンタジーのもつ健全性

河合 (1990) は、「外的世界と内的世界の両者とのかわりによって、人間存在は確かな位置づけを得るのである。(中略)それは、健全であるための相当基本的な条件ではなからうか。」と考察している。さらに、河合 (1991) は「子どもたちの内的世界に心理的に無意識から湧き出てくる内容をもとに、新しく生み出されてくるものがファンタジーである。」とも解説している。このことから、子どもたちの心理的な発達とファンタジーの関連性が認められる。

B. ファンタジーのもつ病理性

河合の考え方は前述したところであるが、ここではファンタジーにおけるもう一つの問題について考察する必要性を感じている。橋本 (2006) も「自閉性障害の診断」において医学的な鑑別の必要性を説いている。

彼が自らの要求行動に際して、ファンタジーの世界と現実世界の間の瞬時の「切り替え」を繰り返していることについて前述したとおりである。このような「切り替え」を繰り返しながら、自らをパニック領域へと誘導しているようであった。特に、彼の「パニック行動」は自らをかむという自傷から始まり、周囲にいる者に対して見境なしに「かみつく」という他害に発展することで一応の終息になることが多かった。

Putnam, F.W. (1997) はこの「切り替え」に注目し、「切り替わりの現れは、しばしば思考の流れの中断、説明のつかない感情の突発的变化、顔つき、ことば、行動、習慣的発作の変化となる。」と説いている。このことは河合 (1991) の「ファンタジーに圧倒された状態」なのかも知れない。このような状況は、単なるファンタジーの世界とは言い難い。さらに、Putnam, F.W. (1997) は、「一つあるいは二つ以上の不安定な中間状態を通過するのが切り替わりである。」とも述べ、精神医学の立場から切り替わりの状況を明らかにしている。

彼らに「パニック行動」がある場合、当該行動について注意深く観察することによりこの行

動に前兆現象があるものと予測したところである。利光ら（1998）は、自閉症児との相互交渉過程を分析し、関与者が用いる「vocal marker」が相互交渉発展におよぼす影響について検討している。この「vocal marker」を Newson（1978）は「乳幼児母子研究の中で、子どもがしていることに母親が間髪を入れずに行う抑揚のある声かけを『vocal marker』とする。」としている。利光ら（1998）は「相互交渉が円滑になるにつれ、『vocal marker』はある程度までは増加し、それ以上増えることはなかった。」とまとめている。このことから、筆者は彼の認知形態が視覚優位であることを考慮し「vocal marker」に「Fingar marker」を加えたところである。彼の要求行動に対する心理的な支援の内容は前述のとおりである。彼らの要求行動がみられた時点において「Fingar marker」によるタイムリーな介入ができれば、彼の「パニック行動」の阻止または減少につながると考えたからである。

また、中根（1997）は「知覚変容現象」について注目している。中根（1997）によると「自閉症の人々は何らかの要因を契機にして一時的にそれまで慣れ親しんでいたと思われるさまざまな事象に対してあたかも今まで知覚していたことがないかのように恐れたり強い好奇心を示したりという現象に遭遇した。」と説いている。中根（1997）は「これが青年期にもおこり自閉症の病態が悪化することも多い。」とも指摘している。

4．発達障害と心理的な支援について

辻井ら（1991）は、「近年、自閉症問題の関心は幼児期・児童期から、青年期・成人期へと移りつつある。」と説いている。辻井ら（1991）の研究では、「対人関係スキルの形成を目指して」、「問題行動の発達の意義」、「今後の実践的・理論的展開へ向けて」の3項目において青年期にある彼らについての考察がなされている。その中で、「特に、自閉症児をめぐる『構造』のなかでもこころの構造の記述をより詳しくおこなっていく必要がある。」と解いている。彼らは何かをきっかけに不安定な状況になることがあるが、この時も心理的な何かが影響しているものと考えられると説いている。また、杉山（1991）の Time Slip 現象（特異な記憶想起現象）、つまり自閉症生徒の現在の感情と結びついて、過去の感情の出来事が想起して泣いたり怒ったりするということを明らかにしていることにも注目し、これらに対する心理的な因果関係の存在が考察されている。

滝川（2004a）は、自閉症の心理を「自閉症のこころの世界」としてこのようにまとめている。依存性の乏しさ（自閉症の子ははるかに交流性に乏しい孤立した精神生活の中で生活している。）、不安緊張の高さ（まわりに関してわれ関せず、マイペースで自由気ままに振る舞っているように見えるが、実は高い不安緊張のうちにある。）、感覚・知覚の過敏さ（とても敏感な感覚や知覚の世界を生きている。）、情動の混乱しやすさ（とりわけ不安緊張が高く、過敏でしかも感覚・知覚的な体験世界そのものが混乱している。）、強いこだわり（カナーが「同一性保持への強迫的欲求」とよび、自閉症の大きな特徴とした極端なこだわりや反復）。

彼が卒業した後の新しい環境への適応について、中根（1997）は「施設は彼らの生活を豊かなものにするための場であるはずなのに、しばしば再教育の場に変貌することがある。」と述べている。特に、「かみつき」などの攻撃行動を中心とした問題行動などがみられる者に対しては保護者も施設職員も困惑していることに言及し、適切な対応が見出せない状況であることを紹介している。

このように、自閉症生徒のおかれた状況は非常にわかりにくい。次良丸（2002）は「自閉症の保護者に対する心理支援や心理療法の重要性」を説き、Tustin（1990）も「脳に障害（器質的な障害）があっても、心理療法によってそれ（心理的な葛藤など）が消失する傾向にある。」と論じるように、本人にも保護者にも心理的な支援が有効にはたらくものと期待されている。

5．母親に対する心理支援について

彼らの養育の主体はほとんどが母親であった。学校への送迎から食事・身の回りの世話など、母親がリーダーシップを発揮している事例に多く接したところである。母子関係が当該家族それぞれの心理状態に影響しているという現実を目の当たりにすることが非常に多かった。しかし、母親の話からは本人以外の家族の存在を確認することは難しかった。たとえば、不登校傾向を示す兄弟の出現や嫁・姑関係の悪化などが情報として徐々に提供されることはあったが、ただちに母親の言葉に他の家族が登場することはなかった。そのため、母親を心理的に支援することによる当該関係を良好に保つことに心がけた。

厚生労働省(2005)は、発達障害者の家族に対する支援の重要性を指摘している。多くの研究者が、「自閉症の子どもは出産時ほとんど問題なく過ごすことができているが、生後約30ヶ月頃になって何となくこの子は普通と違うと感じ始める頃に母親の葛藤が始まる。」と説いている。これ以降、母親はそれぞれ心理的な問題をかかえながら我が子に対する支援を続けなければならない。多くの母親に心理的な葛藤が予測された。このことの多くが、母親の周囲に対する自らの罪悪感を感じた。このことが、情報提供を極端に少なくしている原因のようであった。

障害児を持つ母親について、鑪（1963）は母親の8段階の受容過程（一部修正）を以下のように心理的な変容を説いている。「子どもが障害児であることの認知過程、盲目的に行われる骨折（ほねおり）、苦悩的体験の過程、同じ障害児を持つ親の発見、障害児への見通しと本格的努力、努力や苦悩を支える夫婦、家族の協力、努力を通して、親自身の人間的成長を子どもに感謝する段階、親自身の人間的成長、障害児に関する取り扱いなどを啓発する社会的活動の段階である。」としている。この研究では親の手記をもとにした苦悩や絶望感までも研究対象としており、子どもを受容するための諸要因にも言及している。このように、子どもの養育過程において経験する葛藤などが母親を心理的に強化することにつながり、その環境に適応することができる母親として成長していくと考えられている。すでにこの研究から半世紀の時間が過ぎているが、発達障害を取り扱う場合の母親に対する心理的な支援は不可欠

であり、今日においてもこの指摘に学ぶべきものは大きい。

また、木谷（2010）も母親支援の必要性について「生活環境や対人関係からくる精神的な傷つきやすさをもつ場合には、より個別的、発達に応じた柔軟性ある包括的支援が必要である。」と説き、次の2点について論考している。第一は「自閉症児・者が素朴に、健気に、世俗的になることは事実を発達の視点と精神的力動的視点の両面から理解するアプローチが必要である。」としている。第二は、「家族との関係性の再構成へのアプローチである。」としている。本事例においては母親からの情報提供が極端に少なく、状況把握に困難をきたすことが多かった。しかし、母親は彼らの反応にできる限り対応しようとしていることが各所で見受けられるのも事実であった。このように、母親の愛情を確認することができる点において、母親に対する受容と共感による効果を期待してもよいと考えられる。

まとめ

彼に対する心理的な支援については、心理療法的な接近ではなく精神分析的に接近する方法で臨んだ。なお、彼の発達状況については、「S - M社会能力検査」を使用して客観性をもたせた。これらをもとに心理的な支援を実施し、その効果や妥当性を臨床心理学や精神医学等の視点で考察したところである。

彼の心理的な発達段階については、Freud,Sよれば「エディプス期」の段階であり、Erikson,E.Hの発達段階論に当てはめてみると「自立性 vs 恥・疑惑」の段階にあるものと推測し本研究をすすめた。しかし、本研究において「パニック行動」の解消と「エディプス期」の課題の克服の関連性について実証できなかった。このことについては、今後の課題としたい。

辻井ら（1991）の研究にもあるように「自閉症問題の関心が青年期・成人期へと移りつつある。」ことに注目し、各発達段階のさまざまな問題に対する心理的な支援の必要性としてこれを理解したところである。彼はファンタジーの世界をもち、自らの現実社会から離れ無意識的に心理的な安定を望んでいるものと考えられた。しかし、彼の要求行動は自らの現実社会に戻らなければならず、ファンタジーの世界からの要求行動はできないように感じられた。それがPutnam,F.W.（1997）のいう「切り替え」を行っている時であり、彼が心理的に不安定なタイミングのようであった。ここが彼のウィークポイントであり、心理的な支援が必要なタイミングであると考えられた。

このように、彼の「パニック行動」を注意深く観察することにより、前兆現象があることを理解することができた。事例によっては「Fingar marker」の内容を工夫することが有効であると考えられる。この反復練習により、指を提示しただけで意味することを自分の口で復唱できるようになった。このことは初期段階では単なる反響言語であったと思われるが、彼の認知形態が視覚優位であることに対する学習と理解した場合は意義深い。なお、実施後約2ヶ月後には「vocal marker」のみの介入が可能になったことも付け加えておきたい。

このことによって、「切り替え」後の「パニック行動」に発展するリスクが軽減できたものと考えられる。この要求行動の平均は1日3～4回であったが、そのたびこの試みを実施し「パニック行動」に発展する回数も減少の一途をたどった。このことは、筆者による彼のアセスメントが影響しているのかも知れない。この事例についても医療との連携が不可欠であることを痛感したところである。また、「time out 法」との併用も効果的であると考えられる。これらにより、「パニック行動」直前の感情が沈静化される方向にベクトルが向いたものと考えられる。「パニック行動」に発展する直前の状況については、精神医学の立場から「切り替え」の理論を明らかにしている Putnam,F.W.(1997)の考え方に学んだところである。また、「vocal marker」の研究で有名な Newson (1978)の考え方についてもこのような方法で取り入れたところである。両者の理論や研究が本研究にも成果をもたらしたのと考えられる。

なお、適切なアセスメントに裏付けられた「Fingar marker」の考案により、多くの事例に対して本研究が有効にはたらくのではないかと期待は膨らむばかりである。

<参考文献>

- AMERICAM PSYCHIATRIC ASSOCIATION (1994): DIAGNOSTIC CRITERIA FROM DSM-Ⅱ :
高橋三郎ほか訳 (1995): DSM-Ⅱ , 精神疾患の分類と診断の手引 . 医学書院 .
- Frances Tustin (1990): The Protective Shell in children and Adults, Karnac books, 1990 .
- Freud, A (1936): 自我と防衛 . 外林大作 (1968) 訳 . 誠信書房 .
- 次良丸睦子他 (2002): 発達障害の臨床心理学 . 北大路書房 .
- 橋本俊顕 (2006): 自閉性障害の診断 , 診断と治療社 , pp.16-27 .
- 加我牧子他編 (2006): 医師のための発達障害児・者診断治療ガイド最新の知見と支援の実際 .
- Kanner (1943): 「情動的交流の自閉的障害」
- 河合隼雄 (1990): 「うさぎ穴」からの発信 子どもとファンタジー . マガジンハウス .
- 河合隼雄 (1991): ファンタジーを読む . 楡出版 .
- 菊池哲平 (2004): 自閉症における自己と他者 , そして心 - 関係性 , 自他の理解 , および情動理解の関係性を探る - . 九州大学心理学研究 , 第 5 巻 , pp.39-52 .
- 木谷秀勝他 (2010): 高機能広汎性発達障害児者の家族支援に関する臨床心理学的研究 - 「家族らしさ」を安定させる視点から - . 九州大学心理学研究 , 第 11 巻 , pp.225-233 .
- 厚生労働省 (2005): 発達障害者支援法の施行について
- 古荘 純一 (2006): 軽度発達障害と思春期 理解と対応のハンドブック . 明石書店 .
- 文部科学省 (2007a): 特別支援教育の推進について (通知)
- 文部科学省 (2007b): 平成 19 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
- 文部科学省 (2008): 『教育振興基本計画』
- 中根晃他編集 (1997): 自閉症治療スペクトラム 臨床家のためのガイドライン . 金剛出版 .

- 成瀬悟策 (1985): 発達障害児の心理臨床. 九州大学出版会.
- Newson (1978): コミュニケーション研究のアプローチ. Lock, A(e.d.) Action, Gesture, and Symbol. Academic Press. 鯨岡峻・鯨岡和子訳 (1989). 母と子のあいだ, ネルバ書房.
- 小此木啓吾 (1973): フロイト その自我の軌跡. 日本放送協会.
- Putnam, F.W. (1997): 解離 青年期における病理と治療. 中井久夫訳 (2001). みすず書房.
- 杉山登志郎 (1994): 就労に挫折した自閉症青年の臨床的検討. 発達障害研究, 第 16 巻, 第 3 号, pp.98-2207. 日本発達障害学会.
- 滝川一廣 (2004a): 「こころ」の本質とは何か - 統合失調症・自閉症・不登校のふしぎ. 筑摩書房.
- 滝川一廣 (2004b): 新しい思春期像と精神療法. 金剛出版.
- 鑪幹八郎 (1963): 精神薄弱児の親の子ども受容に関する分析的研究. 京都大学教育学部紀要 第 巻, pp.145-173.
- 利光恵他 (1998): 自閉症児との相互交渉過程における vocal marker の検討. 九州大学教育学部紀要, 第 43 巻, 第 2 号, pp.245-254.
- 辻井正次他 (1991): 青年期自閉症児の対人関係スキルの形成を目指して - 象徴・言語操作の可能な自閉症児への構造論的アプローチ - .名古屋大学教育学部紀要, 第 38 巻, pp.167-178.
- 八並光俊 (2006): 「応用実践期におけるチーム援助研究の動向と課題 - チーム援助の社会的ニーズ生徒指導の関連から - 」. 「教育心理学年報」, 45, pp.125-133.